

お茶うけ 第61話

薩摩焼(2) - 土に祈り 火を畏れつつ -

第14代沈壽官家の門から庭に入ると、奥の母屋の手前右手に、沈壽官家歴代伝世品収蔵庫があります。そこには、初代沈当吉から14代沈壽官までの、それぞれの作品が陳列されています。私は簡単な解説書で読んだ、「薩摩焼には白薩摩(白もん)と黒薩摩(黒もん)があり、江戸時代は、白薩摩はすべて島津家御用の品として納めるもの、黒薩摩は民間で使うものと決められていた」というごく初歩的な知識しか持っていなかったため、目の前に並ぶ作品の素晴らしさに驚きました。

収蔵庫の図録から紹介いたします。

白薩摩には、12代沈壽官がオーストリアのウィーンの万博に出品するために作った「白地大像置物」などがあり、純白や薄クリーム色の温かい感じがします。

白薩摩に染め付けをした美しい花瓶も多くあり、14代沈壽官が大阪万博に出品した「翔鶴文錦手花瓶」などがあります。

12代沈壽官が開発した白薩摩の透彫(すかしぼり)の精巧さは、思わず息を呑むほどで、13代沈壽官作の「透彫伏香爐」が印象に残りました。

白薩摩が多い中で、12代沈壽官作の「御前黒釉獅子面花瓶」は、不思議な黒の光沢を持った黒薩摩でした。御前黒は、殿様の御前に出してもはぶかしくない名品とされ、黒薩摩であっても、これだけは島津家御用のみに限定されていました。御前黒を作るのは特に難しく、一子相伝の秘法によると言われます。

沈壽官家の母屋では、現在の作品を展示し販売していました。母屋の左に登り窯があり、その窯の頂と同じ高さにある奥庭に工房がありました。この辺りの様子は、NHKの11月18日の「昼時日本列島 誕生 400年の薩摩焼」で放映されました。

『日本のやきもの 薩摩』の本に、薩摩焼の土造りの過程が詳しく書かれています。例えば、白薩摩の場合は、「原料となる粘土を細かく打ち砕いて、水にひたしてかき混ぜ、大きな水瓶の上に置いた目の細かい篩(ふるい)を数回潜らせる。水瓶の底に沈殿した微粒子を取り出して、板の上で乾燥させる。3種類の粘土を決められた割合で混ぜ合わせる。この混合物を広い台の上に置いて、固い木の槌で約3000回打ち砕く。これで一応焼き物の原料の状態になるが、陶工がロクロで使うためには、さらに3000回木の槌でたたく」のです。それは、「土は、たたくほどよく伸び、長くねかすほど質がよくなる」からです。

また『故郷忘じがたく候』の本には、14代沈壽官が御前黒の釉薬(うわぐすり)を求めて、山村の奥深くに住む年老いた郷土(ごうし)のところに通いつめた様子が書かれています。何度も何度も通って、やっと郷土が釉薬になる土のある場所を教えてくれることになりました。沈壽官は八十才を越して歩行が困難な郷土を背負い、郷土の指図に従って裏山をあちらこちと、くわで掘りました。一日中歩いては掘り、掘っては歩きましたが、目当ての土は見つかりません。日暮れ近くなって、郷土が「あの崖を掘れ」と言いました。崖を覆う羊歯(しだ)を鎌で刈り取って、地面を掻きおこしますと、焦げ茶色の上質のチョコレートのような湿った土がありました。つかみとって舐めてみると鉄を含んだ濃い味がしました。これこそ御前黒の釉薬を作る土でした。

沈壽官は、直ちにその釉薬を使って御前黒を焼きますが、いくら焼いても光沢のある黒は出ません。ついに窯一つを無駄にするつもりで、この釉薬のものだけを窯一杯に詰めて焼きました。恐るおそる窯を開けますと、沢山のものの中のほんの数個にだけ、まるで偶然のように御前黒が出ていました。

収蔵庫の見学を終えて、『沈壽官家歴代伝世品収蔵庫図録』を購入し、記念の署名を依頼したところ、不在とのことでしたが、後日署名入りの『図録』が郵送されてきました。『図録』の扉に、「土に祈り 火を畏れつつ」の言葉と、陶工14代沈壽官の署名が墨ぐるりと書いてありました。「土に祈り 火を畏れつつ」は、沈壽官家の歴代の当主が代々受け継いできた作陶の心を表す言葉であるのを感じました。

以上

参考資料:

『沈壽官家歴代伝世品収蔵庫図録』(有)沈壽官苑 刊

『故郷忘じがたく候』 司馬遼太郎著 文春文庫

『日本のやきもの 薩摩』 沈壽官・久松良城著 (株)淡交社刊